

[原 著]

## 剣道における「足さばき」に関する史的研究

—大正期から昭和初期の「胴技」に着目して—

矢野 裕介\*

(2007年5月7日受付, 2007年8月2日受理)

### A Historical Study of “Ashi-Sabaki” in Kendo

—Focusing on “Do-Waza” in Taisho Period to Early Showa Period—

Yuusuke YANO

This study directs attention to a process of formation of “ashi-sabaki,” which is one of basic techniques in cutting to body. Specifically, this study clarifies how “ashi-sabaki” in cutting to body had been instructed since Taisho Period to early Showa period by considering some guidebooks about Kendo published at that time.

Some outline of this study follows.

1. Takano Sasaburou, the author of “Kendo,” defined stepping out with left-foot in cutting to right side of body as a basic technique. His purpose was the instruction of techniques by the correct line of a sword.

2. According to the “The basic instructional method of Kendo,” stepping out with right-foot in every technique was defined as a basic technique of “ashi-sabaki” in cutting to body. On the other hand, stepping out with left-foot was still defined as an applied technique.

3. According to some book of kendo written by Tokyo High School of grand master, stepping out with right-foot in cutting to right side of body had gradually been accepted. It is because the establishment of instructional method in collective executive was speeded up.

4. In the late Taisho Period, according to the instructional method of “ashi-sabaki” in cutting to right side of the body described by Dainihon Butokukai professional school of martial art, stepping out with right-foot was defined. It is the same instructional method defined in “The basic instructional method of Kendo.” On the other hand, Ogawa Fumiaki was instructed the instructional method in collective executive by Takano, he viewed the stepping out with left-foot in cutting to right side of body.

5. In Showa period, in order to unite some teaching materials, Tokyo High School of grand master and Dainihon Butokukai professional school of martial art defined stepping out with right-foot in cutting to body. In cutting to right side of body, they must learn to use the correct line of a sword in doing it. Cutting to left side of body must be limited to be used on some special occasion. More specific occasion to bring some technique had been brought out.

**Key words:** Kendo, ashi-sabaki, do-waza, Taisho period, early Showa period, sport history

**キーワード:** 剣道, 足さばき, 胴技, 大正期, 昭和初期, スポーツ史

#### 1. 研究の意図と着眼点

現行の剣道は、生命への危険性のある技術に制限と危険防止の方法が加えられ、一定の規則が設定された競技として成立したものであり、形態そのものは、「競技的技術」の流れを汲むものであるが、その一方で理

念的な部分は必ずしもこの流れに沿ったものではない<sup>1)</sup>。ここにみられる矛盾や隔たりが、現行の剣道に対する見解の一致を阻んでいるのである。

その一例として、有効打突の基準<sup>2)</sup>（審判員側の有効打突の判断）の問題が挙げられる。現行の剣道にお

\* 大学院博士後期課程 スポーツ文化・社会科学系

ける有効打突は、試合においては最終的に三人の審判員各自の主観（価値基準）によって判断される。つまり、有効打突は審判員の考える「正しい剣道」によって判断されることになるのである。この「正しい剣道」とは、剣道にかかわる多くの人たちが正しいと認識した剣道であり、それは現在行われている剣道の方式を決定づける大きな影響力を保持するものである。そのため、有効打突として認めてもらうには、ここでいう「正しい剣道」による打突、より広い視野からとらえるならば「正しい剣道」に合わせた「足さばき」<sup>3)</sup>で打突を行わなければならない。

剣道における「足さばき」<sup>4)</sup>は、相手を打突したりかわしたりするための「足の運び方」を意味し、体をさばくための基本として位置づけられており、「歩み足」<sup>5)</sup>、「送り足」<sup>6)</sup>、「開き足」<sup>7)</sup>、「継ぎ足」<sup>8)</sup>、そして打突時における「踏み込み足」（右足からの「踏み込み足」、左足からの「踏み込み足」）などにおおよそ分類<sup>9)</sup>することができる。しかしながら、今日における剣道の指導場面では、左足からの「踏み込み足」の指導が全く行われていないといっても過言ではない。現行の指導において、左足からの「踏み込み足」は悪弊な「足さばき」として忌避され、指導を受ける側も疑いなしにそう認識しているというのが現状である。「踏み込み足」に関してはさらに、今日において、規則上左足からの「踏み込み足」が認められているにもかかわらず、右足からの「踏み込み足」が主流をなし、左足からの「踏み込み足」を目にすることはほとんどない（諸手上段の構えを除く）<sup>10)</sup>。そのため現行の剣道における有効打突としての「足さばき」は、右足前での「送り足」「継ぎ足」「開き足」を指すことから、右足からの「踏み込み足」によるものが一般的なものとされている。つまり、有効打突の基準となる「適正なる姿勢」とは、右足前での「送り足」「継ぎ足」「開き足」、右足からの「踏み込み足」による「足さばき」にほぼ限定されているのである。そのため現状では、仮に左足からの「踏み込み足」で有効打突に値するような打突があったとしても、それが剣道を実践する人々の共有イメージとして形成されていないがために、有効打突として認められにくいのである<sup>11)</sup>。

しかしながら、左足からの「踏み込み足」による打ち方は、文部省から発行された『剣道指導の手引』に、胴打ちの基本の打ち方として、「胴打ちの基本的な打ち方は、両腕の間から相手の胴が見えるように振りかぶり、右足から踏み込んで相手の右（左）を打つ方法である。なお、左足を前に出して右（胴）を打つ方法もある」<sup>12)</sup>と示されている。また、左足からの「踏み込み足」による打ち方は、全日本剣道連盟が発行した『幼少年剣道指導要領』の中にも、応用の技術としてで

はあるが、「面返し右面」「胴返し面」などが紹介されているのである<sup>13)</sup>。このように、「歩み足」、左足からの「踏み込み足」は現在の指導書には示されているものの、実際の場面で目の当たりにすることはほとんどないのである。

剣道における指導方法が、現行の剣道のような、いわゆる教師が生徒に対し一斉に指導するようになったのは、明治44年、撃剣が中学校の正科教材として取り扱ってもよいことが初めて認められた際、これに伴い明治44年11月6日より5週間、東京高等師範学校において、文部省主催による現職武術教師の講習会が開かれたのであるが、この講習会によって指導されたものが「団体教授法」と呼ばれる一斉指導法であり、この指導方法が教授されたことに始まる。そして昭和11年、第二次改正が行われた学校体操教授要目において、剣道の教授要目が初めて制定されたのであるが、それは実質的には大正期から昭和初期における団体教授法を集約して制定されるに至る。そこで本研究では、以上の観点に基づいて大正期から教授要目が制定される昭和11年までに刊行された剣道書における「基礎技術」の「胴技」における「足さばき」について、どのように解説されていたのか、またどのような理由から「基礎技術」として位置づけられていたのかについて目を向けることとしたい。

これまで、剣道に関する史的研究においては、技術史の観点からの技の体系化、形成過程を整理したものの、および学校制度史の枠組みにおける剣道の変遷を明らかにしたものがあるが、本研究で着目する「足さばき」についてはどれも断片的に触れられている感は否めず、大正期から昭和初期の剣道書における「基礎技術」としての「胴技」にみる「足さばき」について取り組まれたものではない。しかしながら、以下に挙げる研究は、本研究を展開していくうえで大いに参考になる部分があることから、先行研究として取り上げていきたい。

長谷川弘一による「剣道の技の体系化と技術化について—胴技を中心として—」（入江康平編『武道文化の研究』第一書房、1995）は、明治17年に高坂昌孝によって著された『剣術名人法』の胴技の分類法を基調とし、昭和11年の文部省指導要目が発表されるまでの胴技の分類の推移を追う研究である。したがって、胴技の体系化の分析が中心であり、各胴技における「足さばき」については検討が加えられているものの、「基礎技術」における「胴技」の「足さばき」については、大正期の一部書物にのみ分析されているにとどまり、昭和初期における「基礎技術」における「胴技」の「足さばき」については分析がされていない。同じく長谷川の「剣道における足構えの技の体系論との関

連について一堀田捨次郎の著書にみられる足さばきを中心に一(「武道学研究」第21巻2号、日本武道学会、1988)は、大正期の剣道における「足さばき」を、堀田捨次郎による著書の検討を通して明らかにしたものであるが、堀田以外の剣道書における「足さばき」については一部触れられているだけである。また長谷川の「明治・大正期における剣道の足構えについて」(「武道学研究」第21巻3号、日本武道学会、1989)は、表題のとおり、明治期から大正期における剣道の足構え、とりわけ足幅に注目した技術史研究であり、本研究の中心課題となる「胴技」における「足さばき」については分析がされていない。長尾進による「剣道における競技的技術の形成過程について—「足遣い」を中心に—」(入江康平編『武道文化の研究』第一書房、1995)は、近世後期から大正期における剣道の「足さばき」の形成過程について技術史の観点から整理したものであり、大正期の東京高等師範学校関係者による書物についての「胴技」における「足さばき」の分析がされており、本研究に対して示唆するところが大きい。しかしながら、大正期の大日本武徳会関係者の書物については一部触れられているだけであり、分析が不十分である。つまり、大正期における剣道書に対して十分な検討が加えられているとは言いがたい。また昭和初期における「基礎技術」における「胴技」の「足さばき」に関する研究はされていない。

以上より本研究では、大正期から昭和初期に刊行された剣道書に焦点をあて、「基礎技術」としての「胴技」を解説する場合に、どのような「足さばき」が提示されていたのかということに着目し、剣道の「胴技」にみる「足さばき」の形成過程の一側面について論究するものである。

## 2. 東京高等師範学校と大日本武徳会武道専門学校にみる「足さばき」の相違

### 2.1 『剣道』(東京高等師範学校教授 高野佐三郎著、1915)における「足さばき」

明治44年7月31日に、中学校令施行規則の一部改正により、「撃剣及柔術ヲ加フルコトヲ得」<sup>14)</sup>と、初めて中学校の正科教材に剣道が組み込まれることとなった。これに伴い、明治44年11月6日より5週間にわたり、東京高等師範学校において、文部省主催による現職武術教師の講習会が開かれた。この講習会は、当面の指導者を確保することと、全国的に統一した教授内容・方法を確立するうえで非常に重要な役割を果たしたのである。そこで武術講習会での実績を踏まえて、東京高等師範学校は総力を注いでその実践例をまとめ、大正4年に高野佐三郎著として『剣道』を出版したのである<sup>15)</sup>。この中で高野佐三郎は、「基本

(団体)教授法の要および学校に実施するについての諸問題」として、次に引用するように従来の教授法に対して苦言を呈している<sup>16)</sup>。

従来の教授法は個人的方法にして一時に多人数に授くるを得ず、かつ教師の能力によりその効果に著しき差異あり。学校の正科としては是非とも斯道学習に適切なる基本動作を多人数一斉に教授するの要あり。今までこの種団体教授法の公にせられたるもの数種あれども、多くはこれをもってすぐに体操に代用せんと試みたるための基本動作として適切ならざるものあり、心身鍛錬を目的とする斯道の特徴を没却せるのきらい無きにあらず。

武術と兵式体操とを併合することで団体教授法(一斉指導)は可能になったものの、高野の指摘は、「刃筋」の無視や、身体の均一性の発育という点をあまりにも意識しすぎた左右対称の技など、ほとんど通用しない技を創作したために、「刀法的技術」が失われてしまう可能性を極力阻止しようと配慮したものであったととらえられる。また高野は、体操と武術が併合することにより、「陥りやすき弊害」として、以下のように論じている<sup>17)</sup>。

剣道の本旨を忘れ、ただ技術の華美巧妙を競い、あるいは勝敗にかかわりて他を顧みざるがごときは、ややもすれば陥りやすき弊害にして、従来往々視るところ、かくのごとくんば精神の修養上害のあるとも益なし。ことに年少の時代は華美を追いて移りやすく、精神のあるところを忘れて末技の巧妙を望み、かつ競争心はげしきをもって特に戒むるところあるを要す。

ここでは、明治期における剣道、根岸信五郎が明治17年に『撃剣指南』の中で記した中段の構え時の「左右の足は上段に解説せしごとく前後に開き、左足を爪立つべし」<sup>18)</sup>というような、後足(左足)の踵をあげることに代表される、「競技的技術」の重視(技のスピード化)から起こりうる「刀法的技術」の軽視(基本技の軽視、術理の無視)をなるべく避けるように注意が促がされている。

高野はこの『剣道』において、「基礎の撃方」として、正面撃、左面撃、右面撃、籠手撃、巻籠手撃、抜籠手撃、左胴撃、右胴撃、前突、表突、裏突の11本を挙げ<sup>19)</sup>、以下に挙げるように、「右胴撃」に関しては、左足からの踏み込みを教示している<sup>20)</sup>。

両臂の間より敵胴の見ゆる程振り冠り、左胴撃と反対に左足より稍左斜前方に進み、右足は之れに伴ひ、斜左上より両臂を伸して敵の右胴に打ち込む。この場合両臂の交叉したる所は、臍の中心を失はざるやう且つ両臂を以て抱き挟み、刀の動揺せざるやう心掛け刃は右方向を向く。

つまり、この技術は、富永堅吾が『最も実践的な学生剣道の粹』において「割合に手元が交りやすく、平撃ちにならないで、正しく撃ちやすいという利がある」<sup>21)</sup>と指摘したように、高野は初学の段階における剣道の指導において左足からの打ち込みを「基礎の打ち方」として位置づけることで、正しい刃筋による打突・技術を習得させることに重点を置いたのである<sup>22)</sup>。これは『剣道』の「基本練習の要旨」にある「決して唾鈴または棍棒の代りに剣を持てる体操たるがごとき弊に陥らざるを要す」<sup>23)</sup>という記述からもみとれる。また、「応用の撃方」としての「籠手・右(左)胴二段の撃ち方」や「摺り上げ・右胴二段の撃ち方」、「押え・前突き・右胴三段の撃ち方」なども、左足からの踏み込みによる打突である<sup>24)</sup>。「応用の撃方」に関しては「教授法の注意」のなかで、次の引用から確認できるように、「基礎技術」(左足からの踏み込み)をしっかりと習得させた上で応用の技術を習得させるよう指摘している<sup>25)</sup>。

各動作ともよくその趣旨のあるところを明瞭にし、複雑なる動作はこれを分解して教え、初めは緩徐に、漸次迅速に練習せしめ、基礎の撃ち方に習熟せば応用の撃ち方を授け、あるいは適宜数運動を連続せしむるなど、易きより難きに及ぼし確実に習得せしむることに勉むべし。基本練習に熟練すれば対敵練習の基礎確立してその進歩著しく、機に臨みて自在にこれを変用するを得べきなり。

つまり、一つ一つの「基礎技術」における「刀法的技術」を明確に理解・体得させた上で、「応用技術」を習得させ、「競技的技術」の場(剣道における試合)で実践させようというものである。これは、次の引用からも確認できるように、防具着用時の「聯間動作」において具体的な技の例を取り上げず、あくまで「基本の撃方」、「応用の撃方」を基にして行うよう指示していることから理解できる<sup>26)</sup>。

基本動作に習熟したる時は生徒をして二名ずつ互に相対せしめ(場合により教師と生徒と相対向す)、基本動作の中より適宜の動作を選びて授け

彼我相聯間せる動作を演ぜしむべし。この場合には木刀に代うるに竹刀をもってし、便宜籠手あるいは胴などを着けしめ実際に撃たしむるを可とす。この動作は各個に行なうときよりも一層氣勢を増し気合を養い的確なる刺撃に熟練せしむるを得べし。この練習は基本動作と対敵練習との中間に位し、ある時期においては有益なる練習法なり。

また高野はこの『剣道』において、千葉周作によって体系化された「剣術六十八手」を、明治44年の撃剣の正科採用にあたって「手法五十種」として精選し、新たに体系化された剣道を紹介した<sup>27)</sup>。この中の「胴業七種」における「面籠手胴」においても、「中段の構えにて守りおる時、敵中段より下段に下げんとするところを一步踏み込み正面を撃ち、一步退きて籠手を撃ち、左足を踏み出し手を返して敵の右胴を撃つ」<sup>28)</sup>として、左足からの踏み込みによる打突を示している。

このように、高野佐三郎は剣道の伝統的武術としての特性をしっかりと技の中に生かすよう、明治期以降に培われていった剣道における技法や指導方法から脱却して、新たに「団体教授法」を確立し、「刀法的技術」に重きを置いた剣道を形成したのである。

## 2.2 『剣道基本教授法』(大日本武徳会武術専門学校編、1918頃)における「足さばき」

明治44年に、撃剣が正科として認可され、同年より文部省主催の武術講習会が東京高等師範学校において毎年開始されるようになったことは、先述したとおりである。この講習会に大日本武徳会の関係者が講師陣として加わるようになるのは、大正3年7月6日より開催された第3回の講習会からで、内藤高治が講師陣として加わった<sup>29)</sup>。

大日本武徳会武術専門学校でこの講習会での成果を『剣道基本教授法』<sup>30)</sup>としてまとめ、同書を武術教員養成の教本として使用し「団体教授法」の指導を行ったのである。『剣道基本教授法』では、「號令によりて多人一齊に行はしむ時は動もすれば精神なき機械的動作」<sup>31)</sup>に陥る可能性があるとし、剣道が「技術にのみ走る可きもの」<sup>32)</sup>とならないように指摘している。これは東京高等師範学校で使用していた『剣道』と同様に、武術と体操を併合させた明治期の団体教授法は、剣道の技における「刃筋」の無視や、身体の均一性の発育という点を意識しすぎた左右対称の技など、技としてはほとんど通用しない技を創作したために、「刀法的技術」を軽視する可能性があるという配慮からなされたものであった。また当時の剣道界に根をおろしつつあった「競技的技術」の重視に歯止めをかけるため、十分に「刀法的技術」を習得したうえで試合に臨

むようにとの指摘も含まれていたのである。これは「總説」の第二項にある「基礎斬撃法に習熟せば次に應用斬撃法及び聯間動作を授けなるべく易より難に入り確實に修得せしむるを要す」<sup>33)</sup> という文章からもみとれる。

『剣道基本教授法』における「基礎斬撃法」は、「剣道初心者に正確なる撃突方法及び術の應用を習練せしめて敏捷確實なる気体剣運用の基礎を與ふるものなり」<sup>34)</sup> 及び「剣道練習上基礎となるべき刀の運用並に撃突方法を習練せしむるものなり」<sup>35)</sup> として、正面、右斜面、左斜面、右籠手、右胴、表突、裏突の計7本が挙げられており<sup>36)</sup>、7本すべてが右足からの踏み込みによる「足さばき」である。つまり「右胴打ち」の際の「足さばき」も、「前と同要領に一動にて敵の胴部を見得る程度に刀を振り上げ同時に前足より十分に踏み込みて敵の右胴を斜に撃つべし」<sup>37)</sup> とあるように、右足からの踏み込みによるものである。ここには「打込には左右の足を踏替えつつ切返す法もあるなり、悪しきにあらず、されども試合には左足を踏み出すは上段の構或は霞の構方にして比較的左足を踏み出すは少数なれば」<sup>38)</sup> という、内藤高治の考え方が反映していたと思われる<sup>39)</sup>。

一方、「応用斬撃法」での「右胴打ち」については、「二段斬撃法」における「籠手右胴の斬撃法」で、「一動にて前と同要領に踏み込み右籠手を撃ち更に二動にて右足より踏み込み右胴を撃ち三動にて静に其位置に於て元の構に復す」<sup>40)</sup> と解説されているように、右足からの踏み込みによる「足さばき」であるものの、「正面右胴の斬撃法」においては「一動にて前と同要領に踏み込み正面を撃ち更に二動にて右足より退き間合を執りて右胴を撃ち三動にて静に其位置に於て元の構に復す」と解説されており、胴を打つ際には右足から退き左足を前にしての打突が示されている。またこうした左足を前にしての「右胴打ち」は、「三段斬撃法」における「籠手正面右胴の斬撃法」<sup>41)</sup> や「摺上正面右胴の斬撃法」<sup>42)</sup> でも解説されている。

また、防具を着用しての「聯間動作」においては、「正面防拂右胴の反撃」、「正面防拂抜胴の反撃」、「正面防拂正面の反撃（摺上正面）」、「籠手防拂正面の反撃」、「籠手防拂正面の反撃（抜籠手）」、「籠手防拂裏の反突」、「表突防拂正面の反撃」、「表突防拂表の反突」、「表突防拂正面の反撃（摺上正面）」、「裏突防拂裏の反撃突」、「裏突防拂籠手の反撃」、「右胴防拂正面の反撃」、「籠手防拂籠手の反撃（摺上籠手）」の計14本が具体例として示されており<sup>43)</sup>、「正面防拂右胴の反撃」においても「仕太刀は對手より正面に撃込み來たるを拂いながら体をカスメて左足を斜前方に出して体を抜き速かに右胴を反撃し其

姿勢にありて次の号令を俟つ」<sup>44)</sup> と解説されているように、左足を前にしての「右胴打ち」が提示されている。

このように『剣道基本教授法』における「足さばき」は、「基礎斬撃法」においてはすべての技で右足からの打突を示す一方で、左足からの打突を「応用斬撃法」の中に残し、そこで具体的に示された「聯間動作」の技は、「刀法的技術」を基盤とした技の繰り出しを明示するものである。また先述した、「打込には左右の足を踏替えつつ切返す法もあるなり、悪しきにあらず、されども試合には左足を踏み出すは上段の構或は霞の構方にして比較的左足を踏み出すは少数なれば」という内藤高次の言葉からも、実際にこの大正期の剣道においては少なくとも左足からの打突による技の繰り出しが行われていたことをうかがわせる。

### 3. 大正後期における「足さばき」

大正10年代に入ると、東京高等師範学校の卒業生等が全国各地で中堅指導者として活躍し始め、講習会の教材内容を基盤として考案された濃密な彼らの教授法が、展開されだした。これにより「足さばき」についても、「基礎技術」として位置づけられていた左足から踏み込む打突が（「右胴打ち」の際）、右足からの踏み込みによる打突へと徐々に統一されていく。

大正12年に多胡全によって著された『体育的学校剣道』は、正面撃、左面撃、右面撃、甲手撃、捲甲手撃、抜籠手撃、右胴撃、左胴撃、前突、表突、裏突の11本を「基本の撃方」として挙げおり<sup>45)</sup>、高野佐三郎の『剣道』と同様の構成となっている。「右胴撃」に関しても、「刀を振りかぶる、両臂の間より敵の胴の狙わるるをもってその度となし、左足より、左斜前方に進みて右足はこれに伴い斜左上方より両臂を伸ばして敵の右胴を撃ち込むものとす。」<sup>46)</sup> と解説されているように、『剣道』と同様、左足からの踏み込みによる「足さばき」である。また、「右胴撃」の際の注意事項として、「胴の基本的斬撃法にして、これらによりて、手の反りを十分自在かつ正確ならしめ、正しく右胴を撃つ練習に努むべし。習熟せば通常右足を前にして手を十分返しつつ右胴を撃ちうるよう進歩すべし」<sup>47)</sup> とし、左足前で「右胴打ち」の技術を習得した後に、右足からの「右胴打ち」を行うように指示している。「左胴撃」に関しては、「太刀を振りかぶる、両臂の間より敵の胴の狙わるるをもってその度となし右足を右斜前方に踏み出し、左足これに伴い、右斜上方より両臂を伸ばして敵の左胴に撃ち込む。」<sup>48)</sup> と示されているように、『剣道』と同様の右足からの踏み込みによる「左胴打ち」を指示している。

しかしながら、中山博道が大正12年に著した『剣

道手引草』では、注意書きの中、「この場合両臂の交叉したところは、臍の中心を失わざるよう」、「竹刀の動揺せざるよう心掛けるべし」<sup>49)</sup> という表現は高野佐三郎の『剣道』と同様の記述であるものの、「基本の撃ち突き方」での「胴の撃ち方」は、以下に挙げるように、左足からの打突を指摘する高野佐三郎の『剣道』の「右胴打ち」とは逆になっているのである。つまり、「基本の撃ち突き方」としての「胴の撃ち方」（「右胴打ち」）は、右足前で行うことと解説している<sup>50)</sup>。

#### （ホ） 胴の撃ち方（三挙動）

一にて

正面撃ちの要領にて竹刀を上段に振り上ぐ。

二にて

右足より一步踏み出しこれに適うと同時に刀を右斜めに返し、胴の懸け声とともに敵の右胴を大きく矢筈に撃ち込む。この場合左右の拳は浅く交差す。

三にて

左足より一步退き、右足これに適うと同時に中段の構えに復す。

#### 胴の撃ち方（一挙動）

一二の要領にて胴を撃ち、三の要領にて中段の構えに復す。

このような「右胴打ち」の「足さばき」における変化（左足踏み込みから右足踏み込みへ）は、高野の指導を直に受けた東京高等師範学校の剣道家の著書にもしだいに現れてくる。

大正13年に金子近次の著した『剣道学』を見てみると、「右胴打ち」について、「兩券を額前一握の處に擧げ「ドヲ」の氣合を掛けると共に、左手下右手下で脈部と脈部とを接しながら、右足を前にし、左足で踏み切り、一步前進して臍の前四握の處に兩腕を伸ばす。」<sup>51)</sup>と指示されているように、右足からの踏み込みによる「足さばき」が採られていることがわかる。更に、翌14年に富永堅吾によって著された『最も實際的な学生剣道の粹』においても、「基本の打ち方」における「右胴打ち」について、「右胴の撃ち方は場合によってさまざまになるが、その基本の撃ち方をいえば、刀を上振上げると同時に右足より踏み込み、切先をわずかに左に回して、相手の右胴を斜右下に撃つのである。」とし<sup>52)</sup>、右足前での踏み込みによる打ち方を示している。補足的ではあるが、「又右胴撃方の一法として、刀を正面に振り上げると同時に、左足をやや左斜前に踏出し、右足をその後にして体を右斜になるように交し、相手の右胴を斜に右下に撃つのである。」と解

説されており、左足からの踏み込みによる胴技の繰り出しも提示している。また富永は「体の進退運用」について以下のように述べてることからも<sup>53)</sup>、前進する際は右足からの踏み込みによって技を繰り出すことを求め、特別な場合に限り左足からの踏み込みによる技の繰り出しを認めている。

体はどういう具合に進退運用しなければならないかといえ、前に進む場合には右足よりして、右足を進めるにつれて左足を進め、退く場合には左足よりして、それに連れて右足を退き、右に進む場合は右足より、左に進むときは左足よりし、左右の足はよく連れ合うようにするのが本体である。とくに業を施す場合に、左右を踏出しあるいは左足を退くとか、又は走るように飛び込むことのようなこともあるが、これは特殊な場合である。

このように、大正後期におけるにおける東京高等師範学校関係者による「基礎技術」における「右胴打ち」における「足さばき」の解説は、右足からの踏み込みによる「足さばき」が中心となっていくのである。その背景には、高野が『剣道』の中で「従来の教授法は個人的方法として一時に多人数に授くるを得ず、且つ教師の能力により其の効果に著しき差異ありき。学校の正科としては是非共斯道学習に適切なる基本的動作を多人数一斉に教授するの要あり。」<sup>54)</sup>と記述されていることや<sup>55)</sup>、『最も實際的な学生剣道の粹』において、「剣道は元來直接に就きて練習するを本則とすれども、少数の教師が多数の学生青年を教授するに當りては勢ひ説明の徹底せず、教授の周到なるを得ざる場合あるを免かれず。」<sup>56)</sup>と述べているように、剣道の団体教授法の確立が目指されていたことが起因しているものと思われる。つまり、統一した団体教授法の確立に向けて、「基礎技術」における「右胴打ち」の「足さばき」は右足からの踏み込みによる打突を中心とする方向へ徐々に収斂されていったのである。

一方、大日本武徳会武道専門学校による団体教授法は、先述したように大正3年に内藤高治が武術講習会の講師を囑託されたときより伝達されたのであるが、『剣道基本教授法』はその団体教授法の教科書として使用されたのである。『剣道基本教授法』が刊行された後に、日本武徳会武道専門学校関係者によって刊行された代表的な著書として、政岡壹実によって著された『剣道指針』があるが、「大人数一斉に號令に依りてなす動作は、動もすれば精神なき器械的動作となり、剣道上何等價値なきものとなる事多し。されば眞劍對敵の心を忘れず、充分緊張せる心にて練習するを要す。」と述べているように<sup>57)</sup>、『剣道基本教授法』と同様、

「精神なき機械的動作」<sup>58)</sup>に陥らないようにと指摘している。そして「基礎の撃方は、剣道諫習上、基礎となるべき刀の運用、並に撃突の方法を會得するものなり」<sup>59)</sup>とし、「刀法的技術」に基づいた練習方法を提示している。「胴の撃方」については、「兩臂の間より、胴の見ゆる程度に振り上げ、一步出てつゝ刀を左より廻して、敵の右胴を斜に撃ち、胴と構ふ。此場合左右の手は交叉すれども柄の中央は正面にある如くす。」<sup>60)</sup>とし、足のさばき方については、「進むには左足にて踏み切り、右足は必要以上にあげる事なく踏出すと同時に左足は之に伴ひ」<sup>61)</sup>と提示しているように、右足からの踏み込みによる「足さばき」が示されている。このように、政岡は「胴の撃方」を『剣道基本教授法』同様、右足からの踏み込みによる「足さばき」で行うことを「基礎の撃方」としている。大正15年には小川文章によって『剣道の学理と實際』が著されたが、小川も「基本諫習の目的及効果」において、以下のように示されているように、『剣道基本教授法』と同様、「精神なき機械的動作」<sup>62)</sup>に陥らないようにと指摘している。

基本諫習の目的は剣道の基礎となるべき基本的動作を同時に多人数の生徒に教授し且之に習熟せしむに在るので此の教育をせず直ちに對敵諫習に移ると竹刀を暴力か又は不合理の力で振り廻し従つて撃突が正確に行はれない、故に剣道に最も必要な基本的動作を選んで諫習せしめ之によりて正しくして確固たる姿勢を作り身體手脚の運動を自由、敏捷且耐久ならしめ斬撃刺突の方法を教へ間合を知り機會を見、氣合を覺らしめ以て正確なる剣道の基礎を與ふるに適切なるものを選んだのである、多人數一齊に行ふ動作は動もすれば精神なき器械的運動に過ぎざるものとなり勝であるから、よく剣道の本旨に鑑み充分に眞劍對敵の氣勢を込めて之を行ひ決して劍を持てる體操たるが如き兵弊に陥らざるやうにせねばならぬ。

しかしながら、「基礎の撃方」としても「胴の撃方」の「足さばき」は、「左胴撃」については「兩臂の間より敵胴の見ゆる程（眼を胴に注ぐのでない）振り冠り、右足より右斜前方に進み、左足は之に伴ひ、斜右上より兩臂を伸して敵の左胴に撃ち込む刃は左方を向く」<sup>63)</sup>と示しているように、『剣道基本教授法』と同様、右足からの踏み込みによる「足さばき」が示されているものの、「右胴撃」においては、「兩臂の間より敵胴の見ゆる程振り冠り、左胴撃と反對に左足から少々左斜前方に進み、右足は之に伴ひ、斜左上から兩臂を伸して、敵の右胴に撃ち込む、この場合兩臂の

交叉したる所は、臍の中心を失はざるやう且つ兩臂を以て抱き挟み、刀の動搖せざるやう心掛け刃は右方を向く」と解説されているように<sup>64)</sup>、『剣道基本教授法』と逆の「足さばき」、つまり高野が著した『剣道』と同じく、左足からの踏み込みによる「足さばき」が示されている。これは小川が『剣道基本教授法』が刊行される以前の大正4年6月20日から翌月の7月10日まで行われた文部省主催の講習會に直接参加し<sup>65)</sup>、高野から団体教授法を授けられたためであると考えられる。また、以下の記述に解説されているように<sup>66)</sup>、高野と同様、「基礎技術」（左足からの踏み込み）をしつかりと習得させた上で「応用技術」を習得させるよう指摘している。

各動作共よく其趣旨のある所を明瞭に説明し複雑なる動作は之を分析して教へ初めは緩徐に漸次迅速に諫習せしめ、基礎の撃方に習熟せば應用の撃方を授け、或は適宜數運動を連續せしむる等易きより難きに及ぼし確實に習得せしむるを可とします、基本諫習に熟諫すれば票突常に合理的に實施する事が出來て悪い習慣、不合理な動作及技癖の豫防となり、對敵諫習の基礎確立して其進歩著しく機に臨みて、自在に之を變化應用するを得るものであります。

このように、大正後期におけるにおける大日本武徳會武道専門學校關係者による「右胴打ち」における「足さばき」の教授法は、政岡が著しているように、『剣道基本教授法』の教授法と同様、右足からの踏み込みによる打突が示されていたが、高野から団体教授法を教授された小川は、高野の『剣道』と同じく、「右胴打ち」において左足からの踏み込みによる技の繰り出しを提示している。

#### 4. 昭和初期における「足さばき」

昭和6年1月10日、文政審議會の答申を受けて、師範學校と中学校の剣道・柔道は正科必修となった。これに前後するかたちで、教材内容の統一に向け多くの教師用の剣道書が刊行されたが、統一した剣道の指導法、つまり剣道の教授要目が制定されることはなく、教材内容の統一に向けて多くの指導案が提示され出した。

東京高等師範學校關係者においては、昭和5年、高野弘正と佐藤卯吉により『最新剣道教範』が出版されたが、高野らは「右胴撃」に関して、「刀を大きく振りかぶり、右足から前方に進み、左足はこれに伴ひ、斜め左上から兩臂を伸ばして、相手の右胴に撃込む。」<sup>67)</sup>とし、「左胴撃」は、「右胴撃と同じやうに刀を振りか

ぶり、右足から右斜め前方に進み、左足はこれに伴ひ、斜め右上から両臂を伸ばして、相手の左胴に撃込む<sup>68)</sup>と示しているように、「右胴打ち」、「左胴打ち」どちらの際も右足からの踏み込みによる「足さばき」としている。また翌6年に齊藤五郎・金子近次によって著された『新制剣道教科書』においても、「右胴打ち」における「足さばき」は右足からの踏み込みによる「足さばき」としており<sup>69)</sup>、また同年、金子近次によって著された『中等学校一年生の剣道教授法』でも、前進の際の足のさばき方は「右足から一步前進し、左足は之に伴ふ<sup>70)</sup>とし、「右胴打ち」の際の「足さばき」も右足からの踏み込みによる技の繰り出しが示されている。このように、東京高等師範学校出身者の著した剣道書においても、胴打ちの際、右足からの踏み込みによる「足さばき」を提示するようになってくるのである。

一方、大日本武徳会関係者においては、昭和5年に白石元一が『剣道教範』を書き著し、この中で白石は、「前に進むには右足より踏み出し、退くには左足より退き、右に進むには右足より左に進むには左足よりするが本體で、特別の場合の外は此の法則に従ふべきである。』<sup>71)</sup>とし、前進する際は右足から踏み込むこと、そして胴の打ち方についても『剣道基本教授法』と同様、右足からの踏み込みで行うことを示している。翌6年に小川金之助によって著された『最新剣道教本』においても胴打ちの際には以下のように、右足からの「踏み込み足」による技の繰り出しが示されている<sup>72)</sup>。

#### (七) 胴の斬撃法

第一動——「一の呼唱」にて刀を左拳の下より敵の胴を見得る程度まで振り被り、右足より一步大きく踏み込んで、切返の第二動の要領にて、敵の右胴を斜に撃ち下す。

第二動——「二の呼唱」にて左足より一步退きて元の構に復す。

しかしながら、同年に高野佐三郎により著された『剣道教本』では、次のように示され<sup>73)</sup>、大正4年に出版された『剣道』同様、「右胴打ち」に関しては左足を前にしての打突、「左胴打ち」に関しては右足からの踏み込みによる「足さばき」を提示しているのである。

### 三 胴の撃方

#### 一 右胴撃

両臂の間より敵胴の見える程振冠り、左足から稍、左斜前方に進み、右足は之に伴ひ、斜左上から両臂を伸ばして敵の右胴に撃込む。此の場合、

両腕の交叉點は中央前に来るやうにし、且両腕で抱き挟み、刀の動搖せぬやうに心掛ける。刃は右に向ける。

#### 二 左胴撃

両臂の間から敵胴の見える程振冠り、右足から右斜前方に進み、左足は之に伴ひ、斜右上から両腕を伸ばして敵の左胴に撃込む。刃は左に向ける。

これは「基本諫習は大人數一齊に行ふ場合が多いので、精神なき器械的運動に過ぎざるものとなり易い。それは剣道で最も嫌ふ所である。』<sup>74)</sup>と示しているように、『剣道』同様、初学の段階における剣道の指導において左足からの打ち込みを「基礎の打ち方」として位置付けることで、正しい刃筋による打突・技術を習得させることに主点を置いている。

このように、昭和期に入ると、胴打ちにおいて右足からの「踏み込み足」による打突が示される剣道書が中心となっていくのであるが、「初心の内は右手首が返り難い爲めに、平撃ち、棟撃ちになり易いものであるから、必ず絃（棟）が左斜上方に、刃が右斜下方に向く様に打ち刃筋に注意すること。』<sup>75)</sup>と白石が示しているように、高野と同様、正しい刃筋による打突を初学の段階で習得させることを目的とし、右足からの踏み込みによる胴打ちを「基礎技術」として位置づけているといえる。

このような基礎の段階で正しい刃筋による技術を求めることは、昭和期に入ると「足さばき」だけでなく、技自体の体系によっても示されてくる。前掲『最新剣道教本』においては、「胴には右・左あるが、混同する虞があるから、右胴のみを説明する。初心の間は左胴を撃たぬ方がよい。』<sup>76)</sup>とし、「左胴打ち」を省いている。この理由については昭和7年に小川金之助によって書き著された『帝国剣道教本』に、次のように示されている<sup>77)</sup>。

#### イ 右胴撃

##### (二) 要領

第一動 「右胴ヲ——撃テ」の號令で、左券の下より敵の胴の見える程度まで刀を振り被り、右足より一步前進すると同時に敵の右胴を右面撃の要領で、斜左上より斜下に刃筋を正して撃ち下す。

第二動 左足より一步退き中段の構に復す。



ロ 左胴撃

(二) 要領

第一動 「左胴ヲ——撃テ」の號令で、左券の下より敵の胴の見える程度まで刀を振り被り、右足より一步前進すると同時に敵の左胴を左面撃の要領で、斜右上より斜下に刃筋を正して撃ち下す。

第二動 左足より一步退き中段の構に復す。

[注意]

逆胴とも云ふ。左胴撃は一見撃ち易い感じがするが、中段に構へてゐる敵の手許が少々上つた位では、刃筋を正して確實に打つ事は困難である。故に初心の内は餘り行はぬがよい

上記引用から、中段の相手に対しては、多少手元が上がったくらいでは刃筋を正して打ち込むことが困難なためであるということから、「左胴打ち」を削除していることがわかる。昭和8年に高野弘正によって書き著された『新剣道』においても、「左胴撃」について、次のように記述されており<sup>78)</sup>、初心の段階では刃筋を正した打突が難しいために、熟練してから「左胴打ち」を行うよう求めている。

この技は、逆胴ともいひ、ちよつと撃ち易い感じのする技で、初心の者はよくこの技を出します。これは刀を返さないで小技で撃つから容易なのであつて、刀を返して正しく撃てば、右胴よりも却つて困難であります。此技は横技と同様、餘程、熟諫してから行ふのがよいのであります。一寸見が打易いので正しい打の出来ない内にやつて見るものが多いのですが變な癖のつかぬ爲には初心はやらない方がよろしいのです。

また、小沢愛次郎によって著された『剣道指南』<sup>79)</sup>や、服部興覇の『剣道教範』<sup>80)</sup>においては、「左胴は常に得安き箇所ではなく、敵が面を打って來た時、突いて來た時等、特別に左胴の開いた場合、機宜に應じて打つべきで、殊更に覗うべき所ではないのである」と示しており<sup>81)</sup>、両者とも「左胴打ち」を「基礎技術」と位置づけているものの、「左胴打ち」は相手の打突に応じる際に打つべきであるとし、余程のことがない限り狙う部位ではないとしている。

このように、昭和期に入ると「左胴打ち」は刃筋正した正確な打突を会得した後に繰り出すこと、左胴を打つ場合は特別な場合に限ることなどの、「左胴打ち」に関するより具体的な繰り出し方が提示されるようになる。

5. 結 び

本研究において検討した結果をまとめると、以下のように整理することができる。

1. 『剣道』を著した高野佐三郎は、初学の段階における剣道の指導において、「右胴打ち」の際、左足からの打ち込みを「基礎技術」として位置付けることで、正しい刃筋による打突・技術を習得させることに重点を置いた。

2. 『剣道基本教授法』の胴打ちにおける「足さばき」は、「基礎技術」においてはすべての技で右足からの打突を示す一方、左足からの打突を「応用技術」の中に残した。

3. 大正後期における東京高等師範学校関係者による剣道書においては、団体教授法の確立が目指されていたことから、「右胴打ち」における「足さばき」は右足前の打突を中心とする方向へ徐々に収斂されていった。

4. 大正後期の大日本武徳会武道専門学校関係者による「右胴打ち」における「足さばき」の教授法は、政岡壹実が著しているように、『剣道基本教授法』の教授法と同様、右足からの打突を示す一方、高野佐三郎から団体教授法を教授された小川文章は、高野の『剣道』と同じく、「右胴打ち」において左足からの踏み込みによる技の繰り出しを提示している。

5. 昭和期に入ると、教材内容の統一に向けて東京高等師範学校、大日本武徳会武道学校の両校の剣道書において、胴打ちの際、右足からの「踏み込み足」による打突が示される剣道書が中心となっていった。また、「左胴打ち」に関しては、刃筋正した正確な打突を会得した後に繰り出すこと、左胴を打つ場合は特別な場合に限るなどの、技を繰り出すより具体的な機会が提示されるようになった。

注記および引用・参考文献

- 1) 杉江正敏:「剣道用具と技術の変遷」岸野雄三編『体育史講義』大修館書店、1984、p. 151.
- 2) 現行の剣道における有効打突の基準は、平成7年に全日本剣道連盟が定めた、『剣道試合・審判規則、剣道試合・審判細則』の第2章、第2節、第12条にある、「有効打突は、充実した氣勢、適正なる姿勢をもって、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるものとする」(全日本剣道連盟:『剣道試合・審判規則、剣道試合・審判細則』全日本剣道連盟、1995、pp. 6-7) という条文に示されている。
- 3) ここでいう「足さばき」は、右足前での「送り足」、「継ぎ足」、「開き足」で、右足からの「踏み込み足」によるものを意味する。
- 4) 剣道の「足さばき」は、第二次世界大戦後に策定された『学校しない競技指導の手びき』(文部省、東風社、1952)のなかで「送り足」、「歩み足」、

- 「つき足」,「開き足」,そして打突時における「とび込み足」の五つが提示され,はじめて体系づけられた。しかしながらこの「とび込み足」という表現は,今日の剣道界では普及しておらず,戦前に使用されていた「踏み込み足」という表現が多用されている。なお,この「踏み込み足」は,明治期30年代以前は「踏み出し」と言われていた。また「足さばき」という言葉についても,戦前は統一された用語がなく,「足づかひ」「足つかい」などさまざまな表記が存在した。
- 5) 前後に遠く速く移動する場合の足さばきで,最も遠い間合いから打突の技を出す時に用いる。
  - 6) いろいろな方向に近く速く移動する場合や,打突の時の足さばきで,一足一刀の間合いから打突の技を出す場合に用いられる一般的な足さばきである。
  - 7) 体を右,左にかわしながら相手を打突したり,防いだりする場合の足さばき。近い間合いからの打突をする場合に用いられることが多い。
  - 8) 遠い間合いから打突するときに用い,相手との間合いを盗む。相手と,攻防のなかで悟られないように左足を右足まで継ぎ,大きく踏み込んで打突するときに用いられる足運びである。
  - 9) 一般的に基本の「足さばき」として「歩み足」,「送り足」,「開き足」,「継ぎ足」に分類されるが,打突時における「踏み込み足」も一連の「足さばき」の動作に組み込まれているため,本研究では「踏み込み足」も「足さばき」に相当するものとして論を展開していく。
  - 10) 一般的な上段の構えとして右上段(右自然体)と左上段(左自然体)がある。ここでいう左上段は,左足を前にして構えるため,左足での「踏み込み足」となる。
  - 11) 長尾 進:「剣道における競技的技術の形成過程について—「足遣い」を中心に—」入江康平編『武道文化の研究』第一書房,1995,p.287。
  - 12) 文部省編:『剣道指導の手引』大蔵省印刷局,1993,p.73。
  - 13) 全日本剣道連盟編:『幼少年剣道指導要領』全日本剣道連盟,1985,pp.119-126。
  - 14) 『官報』第8432号,1911,p.671。
  - 15) 中村民雄・香田郡秀・小林義雄・長谷川弘一:剣道の技の体系化について—団体教授法から教授要目の制定へ—,武道学研究,28(3),4,1996。
  - 16) 高野佐三郎:「剣道」(1915)今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第三巻』同朋舎出版,1986,p.12。
  - 17) 高野佐三郎:「剣道」(1915)今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第三巻』同朋舎出版,1986,p.37。
  - 18) 根岸信五郎:「撃剣指南」(1884)渡辺一郎編『明治武道史』新人物往来社,1971,p.18。
  - 19) 高野佐三郎:「剣道」(1915)今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第三巻』同朋舎出版,1986,pp.59-61。
  - 20) 高野佐三郎:「剣道」(1915)今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第三巻』同朋舎出版,1986,p.60。
  - 21) 富永堅吾:「最も実践的な学生剣道の粹」(1925)今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第七巻』同朋社出版,1986,p.376。
  - 22) 長尾 進:「剣道における競技的技術の形成過程について—「足遣い」を中心に—」入江康平編『武道文化の研究』第一書房,1995,p.283。
  - 23) 高野佐三郎:「剣道」(1915)今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第三巻』同朋舎出版,1986,p.47。
  - 24) 高野佐三郎:「剣道」(1915)今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第三巻』同朋舎出版,1986,pp.58-63。
  - 25) 高野佐三郎:「剣道」(1915)今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第三巻』同朋舎出版,1986,p.47。
  - 26) 高野佐三郎:「剣道」(1915)今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第三巻』同朋舎出版,1986,pp.61-62。
  - 27) 中村民雄:『近代剣道小史』本の友社,2003,p.33。
  - 28) 高野佐三郎:「剣道」(1915)今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第三巻』同朋舎出版,1986,p.106。
  - 29) 中村民雄:近代武道教授法の確立過程に関する研究(三)—文部省主催武術講習会について—,武道学研究,14(1),9,1981。
  - 30) 大日本武徳会武術専門学校編:『剣道基本教授法』大日本武徳会武術専門学校,1918頃。
  - 31) 大日本武徳会武術専門学校編:『剣道基本教授法』大日本武徳会武術専門学校,1918頃,p.4。
  - 32) 大日本武徳会武術専門学校編:『剣道基本教授法』大日本武徳会武術専門学校,1918頃,p.48。
  - 33) 大日本武徳会武術専門学校編:『剣道基本教授法』大日本武徳会武術専門学校,1918頃,p.5。
  - 34) 大日本武徳会武術専門学校編:『剣道基本教授法』大日本武徳会武術専門学校,1918頃,p.25。
  - 35) 大日本武徳会武術専門学校編:『剣道基本教授法』大日本武徳会武術専門学校,1918頃,p.25。
  - 36) 大日本武徳会武術専門学校編:『剣道基本教授法』大日本武徳会武術専門学校,1918頃,pp.26-32。
  - 37) 大日本武徳会武術専門学校編:『剣道基本教授法』大日本武徳会武術専門学校,1918頃,p.31。
  - 38) 内藤高治:剣道初歩・第三回,「武徳会誌」第2巻9号,大日本武徳会,1923,pp.113-114。
  - 39) 長尾 進:「剣道における競技的技術の形成過程について—「足遣い」を中心に—」入江康平編『武道文化の研究』第一書房,1995,p.282。
  - 40) 大日本武徳会武術専門学校編:『剣道基本教授法』大日本武徳会武術専門学校,1918頃,p.33。
  - 41) 大日本武徳会武術専門学校編:『剣道基本教授法』大日本武徳会武術専門学校,1918頃,p.35。
  - 42) 大日本武徳会武術専門学校編:『剣道基本教授法』大日本武徳会武術専門学校,1918頃,p.37。
  - 43) 大日本武徳会武術専門学校編:『剣道基本教授法』大日本武徳会武術専門学校,1918頃,pp.38-44。
  - 44) 大日本武徳会武術専門学校編:『剣道基本教授法』大日本武徳会武術専門学校,1918頃,p.41。
  - 45) 多胡 全:「体育的学校剣道」(1923)今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第七巻』同朋社出版,1986,pp.102-111。
  - 46) 多胡 全:「体育的学校剣道」(1923)今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第七巻』同朋社出版,1986,

- pp. 108-109.
- 47) 多胡 全:「体育的学校剣道」(1923) 今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第七巻』同朋社出版, 1986, p. 109.
  - 48) 多胡 全:「体育的学校剣道」(1923) 今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第七巻』同朋社出版, 1986, pp. 109-110.
  - 49) 中山博道:「剣道手引草」(1923) 今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第七巻』同朋社出版, 1986, p. 190.
  - 50) 多胡 全:「体育的学校剣道」(1923) 今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第七巻』同朋社出版, 1986, p. 109.
  - 51) 金子近次:『剣道学』聚英閣, 1924, pp. 154-155.
  - 52) 富永堅吾:「最も実際のな学生剣道の粹」(1925) 今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第七巻』同朋社出版, 1986, pp. 390-391.
  - 53) 富永堅吾:「最も实际的な学生剣道の粹」(1925) 今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第七巻』同朋社出版, 1986, p. 349.
  - 54) 高野佐三郎:『剣道』良書普及会剣道発行書, 1915, pp. 3-4.
  - 55) 長尾 進:「剣道における競技的技術の形成過程について—「足遣い」を中心に—」入江康平編『武道文化の研究』第一書房, 1995, p. 282.
  - 56) 富永堅吾:「最も実際のな学生剣道の粹」(1925) 今村嘉雄編『近代剣道名著体系 第七巻』同朋社出版, 1986, p. 351.
  - 57) 政岡壹実:「剣道指針」(1925) 中村民雄編『近代剣道書選集 第7巻』本の友社, 2003, p. 38.
  - 58) 大日本武徳会武術専門学校編:『剣道基本教授法』大日本武徳会武術専門学校, 1918頃, p. 4.
  - 59) 政岡壹実:「剣道指針」(1925) 中村民雄編『近代剣道書選集 第7巻』本の友社, 2003, p. 45.
  - 60) 政岡壹実:「剣道指針」(1925) 中村民雄編『近代剣道書選集 第7巻』本の友社, 2003, p. 47.
  - 61) 政岡壹実:「剣道指針」(1925) 中村民雄編『近代剣道書選集 第7巻』本の友社, 2003, p. 96.
  - 62) 小川文章:「剣道の学理と実際」(1926) 中村民雄編『近代剣道書選集 第8巻』本の友社, 2003, pp. 45-46.
  - 63) 小川文章:「剣道の学理と実際」(1926) 中村民雄編『近代剣道書選集 第8巻』本の友社, 2003, pp. 67-68.
  - 64) 小川文章:「剣道の学理と実際」(1926) 中村民雄編『近代剣道書選集 第8巻』本の友社, 2003, pp. 67-68.
  - 65) 『官報』第894号, 1915, p. 518.
  - 66) 小川文章:「剣道の学理と実際」(1926) 中村民雄編『近代剣道書選集 第8巻』本の友社, 2003, p. 46.
  - 67) 高野弘正, 佐藤卯吉:『最新剣道教範 第一巻』東京開成館, 1930, p. 103.
  - 68) 高野弘正, 佐藤卯吉:『最新剣道教範 第一巻』東京開成館, 1930, p. 105.
  - 69) 斎藤五郎, 金子近次:『新制剣道教科書』精文館, 1931, p. 32.
  - 70) 金子近次:『中等学校一年生の剣道教授法』精文館, 1931, p. 69.
  - 71) 白石元一:「剣道教範」(1930) 中村民雄編『近代剣道書選集 第8巻』本の友社, 2003, p. 516.
  - 72) 小川金之助:「最新剣道教本」(1931) 中村民雄編『近代剣道書選集 第7巻』本の友社, 2003, p. 522.
  - 73) 高野佐三郎:『剣道教本 上巻』三省堂, 1931, p. 24.
  - 74) 高野佐三郎:『剣道教本 上巻』三省堂, 1931, p. 10.
  - 75) 白石元一:「剣道教範」(1930) 中村民雄編『近代剣道書選集 第8巻』本の友社, 2003, p. 448.
  - 76) 小川金之助:「最新剣道教本」(1931) 中村民雄編『近代剣道書選集 第7巻』本の友社, 2003, p. 521.
  - 77) 小川金之助:『帝国剣道教本』星野書店, 1932, pp. 44-45.
  - 78) 高野弘正:『新剣道』明信社, 1933, p. 59.
  - 79) 小沢愛次郎:『剣道指南』文武書院, 1927, pp. 105-106.
  - 80) 服部興覇:「剣道教範」(1930) 中村民雄編『近代剣道書選集 第7巻』本の友社, 2003, pp. 379-380.
  - 81) 小沢愛次郎:『剣道指南』文武書院, 1927, pp. 105-106.